

瑠璃光寺境内にある五重塔を一瞥し、豐榮神社、野田神社、今八幡宮に參拜して歩兵第四十二聯隊南裏門前の牧師ザベリヨの紀念碑の傍を過ぎ、大坂大路にある赤十字病院の前を通り古本屋に覗き、明治十五年二月出版の「天道溯源」を購入して山口驛に行つたら、今出雲大社行の汽車が出たといふところで、次の汽車迄には三時間待たねばならぬ。

二、山口支部を訪ふ。三時間を如何に過すべし。驛で待つて居るのも馬鹿らしく、町の主要なところは見物したし、前に龜山公園から降りて、高等女學校のところに出了き、山口支部に行かんものと、覺えに書きつけて置いた、幹事さんの名前を見當らなかつたので、止めたが、この三時間を空費せずに、山口高等學校に行くことにした。フト、トランクの中に天界を入れて來て居ることを思出したので早速繻いて見ると、山口支部、山口高等學校化學教室野垣寛之とあつたので喜んで、學校に行つたら野垣教授は出勤されては居なかつたので、湯田の御下宿に參り、初對面の挨拶をして、支部の近況を聞いたが、同地方で「天界」の購

讀者は三、四十名もあるが、支部の方では高校學生中の會員を相手に三吋望遠鏡を用いて居られるこの事であつた。井上公園七卿紀念碑建設地に案内され、話は一轉して長門峽の奇勝を探ることになつた。

三、長門峽。耶馬溪以上との稱ある、天下の奇勝長門峽は山口線臨時驛、長門峽驛前の御堂ヶ原から、萩町に流れる阿武川の上流約三里に亘る峽谷美の稱である。峽中至るところ、深潭あり、瀑布あり、又兩岸は常綠樹、落葉樹、鬱蒼として茂り、春の新綠秋の紅葉は碧潭に相映じ、其の美觀は所謂天下の奇勝である。午後一時十分山口發、長門峽で下車したのは午後二時四分、某大尉も下車された。野垣幹事の東道で、阿武川に沿ふて下つた。明治四十一年山口高商の講師ガンドレット氏此處を探勝して天下無比と稱揚し、近くは大正九年本邦山林學地質學の泰斗として有名な露伯高島北海氏本峽を跋渉し、長門峽と命名し、自ら探勝道路の開鑿を企て其の工事完成によつて初めて廣く人口に膾炙せらるゝに至つたのである。驛前面の丘上に「長門峽入口」と大書してある此の邊を出合淵と稱し、已に峽中

二四

名所の一つで、丁字川、碁石岩、馬の瀬、千瀑洞、紅葉橋、第一、二、三魚切、龍宮淵等の奇勝を眺め、湯瀬溫泉場に到着した。驛を距ること一里二十七町。某大尉と一所になつたので同行三人。毎年今頃になると旅館の登山閣、萬碧樓、長峽館などが開かれるが、今年は未だ何處も戸が締つて居る。阿武川と金郷川との合流點、金郷出合が本溪中の最勝の地で、之れを見なければ長門峽の長門峽たる眞價を許す資格がないといはれて居るが同地までは未だ十餘町ある。其處まで行くに歸りが夜になつて險阻の道はさても歩かれない、しかしこの儘歸るのも遺憾である。

幸ひ一家があつたので、宿の相談をする。この先きに長門燧元に素人宿をするところがあるとのこと、若しそこで泊めて呉れば宿をして貰ふことに話が決つたので聽秋橋を渡つて大天狗岩、小天狗岩を前にして居る素人宿に依頼して一夜を明す事になつたので、勇を鼓して金郷出合から進んで水電取入口を経て切龍峰、切窓峰迄行つた重屏岩から高瀬に出て川舟によつて阿武川下りも興趣が多いが、引返して金郷溪を遡

り、金松岩、猿溪瀑布の壯觀に接し、長門
 峽を語る資格が十分備つたので、宿へ急
 いで、返つた時は午後六時であつた。

四、長門峽に三士天を談じた。某大尉は小倉
 旅團の副官野溝式彦氏であつた。野垣、野
 溝、水野の三野が長門峽の一民家に會合し
 た。初対面ではあるが、嶮路を二里半共に
 したので、舊知の如くなつた。野垣氏は各
 務ヶ原で一年志願兵として飛行機に乗り廻
 し五千米以上の天空から雲の間をすかして
 地上を瞰下したといふ猛者で近々任官され
 る事の事、余は明治三十二年の士官候補生
 で日露戦役には従軍した一人、野溝大尉は
 名古屋幼年學校の出身者。そこで野溝大尉
 と野垣氏とは話の合ふことが幾つもある。
 余の同期生平野中佐が大分縣隊區を去つて
 小倉師團司令部高級副官を勤めて、實地戰
 術の爲め山口町に來て居ることを聞いた。
 同氏とは時々文通はして居るが相見ざるこ
 と正に二十六年、今朝は何れも山口町に居
 たのであるが、相互に知らなかつたのであ
 つた。野垣氏と余とは「天界」紙上での知り
 人、實に奇遇であつた。「天高く月小なり」
 とは峽中で仰いで月を見るときであること

人が唱へるさ、成る程今日は舊暦何日かれ
 ……ハイカラ娘さんが三月三日を答へた。

それでは最早山に隠れて見えないが、大天
 狗岩に上つたら俄眉山下の月の感がするだ
 らうと云つて大笑ひ。その中に酒肴が運ば
 れた、酒は當地から山路を越えて約二里の
 出雲迄人を使はして取寄せたもの、案外の
 御馳走に舌鼓を打つた。北極星は燦として
 輝き、天高く星小なる心持ちがした。

五、長門燒。景勝の地で此處位交通不便の地
 は少ない、無論自轉車、人力車は駄目、道
 幅三尺位で一方は斷崖、一方は深淵、一步
 を誤れば數十尺の崖から深潭に眞逆様に、
 命が二つ三つなくては助からない様な所が
 多くあるので、天下に久しく知られなかつ
 たのである。長門峽から阿武川に沿ふて萩
 まで七里三十町のうち、高瀬迄三里十六町
 の間が特に交通が不便で徒歩によるより方
 法はないので、景色はよいが土産物がない
 といふので、態々他から土を運び、職人を
 傭入れて或時期に長門燒を製造して、土産
 物にするのだから自然高價となるのである
 事。次から次へ大天狗岩、小天狗岩の奇
 勝を前にして、中天狗が三。話が盡きな

い。宿の主人の話によると猿の群が三つあ
 つて、大なるものは二、三十四。中は十數
 匹。小は五、六匹。山に遊ぶのがよく見え
 る事の事。阿武川の潺湲たるさ、笈の水音
 さを聴きながら夢路に這入つたのは夜半の
 頃であつた。

第三日 三月二十六日 晴、夜雨

長門峽から鳥取まで

一、山口線の見聞。宿を出て湯瀬温泉で野溝
 大尉に別れ。長門峽驛から余は出雲大社行
 き列車に、野垣氏は小郡行き列車に。長門
 峽發車は午前十一時四十四分、北東に進ん
 で陰陽の境界にある津和野に著いた。明治
 二十五年頃小學校で「津和野は石見國にあ
 る山間の都會なり」と學んだが、來て見る
 と成程山間の都會に相違ない。青籬四周の
 地、鶴井氏の舊城下、山上の城址は汽車中
 から見るこゝが出来る。津和野神社、永明
 寺、白糸瀧杯が見るべきもので、名物に源氏
 巻がある。汽車から瞥見するさ如何にも田
 舎町で、藁葺の家が多く、今度漸く中學校が
 設置せられることになつた。汽車中で握飯
 の焼いたのを甘まさうに頬張つて居る土地
 の人らしいのが五人や六人ではなかつた。

其の形の美しい青野山(九五〇米)を厭かず眺め、石見益田驛についた。此處が山口線と山陰線との聯絡點である。

二、日本海の波瀾。益田から海が見え出してそれから海岸に沿ふて汽車は進み、車窓の眺望、山陽線と其の趣を異にして居る。海の碧々として居るのは違はないが、鳥が少い、船が見えない。春から夏へかけて海は穏かであるが、秋から冬には大濤で交通杜絶することがある。日本海々戰のあつた見島を遙かに眺め、長門富士！近くに高島の孤島が浮いて居る。

三、雪の三瓶山。山陽地方は數日前から暖かになつて、冬外套では暑く、春外套を着て居るが、山陰地方は津和野驛附近の山々には雪が未だ残つて居る。石見太田驛から見ると、雲を頂いて居る山陰の名山、三瓶山は中腹から白皚々全く冬景色で、日が西に傾いて來た。出雲今市で京都市の列車に乗り替へたが、夜が更けると寒くなつてくるスチームは通つて居ない。

四、鳥取の大氣焔。鳥取驛についたのは午後十時二分。少し遅くなつたので、失禮とは思つたが、會員大坪雄太郎氏の門をたたく。

さにした。應接室に案内されて見る。机上には一時半の望遠鏡と英文「天界の驚異」と英文「望遠鏡」が光彩を放つて、傍らの箱には數十のアイピースが正しく併べてある。縁には六時半の反射望遠鏡が据付けてある。大坪氏には一昨年總會の節に京都で面會し其の後三時望遠鏡二臺を買入れたことがある。鳥取の天文界……望遠鏡の必要……天文講演會……同氏は全國に行脚して望遠鏡を拜見したいと言つて話された。話は盡きないが夜は次第に更けて、曇つて居るから星を観ることが出来ない。午後十時過から話したり、翌日午前二時過ぎ迄も、餘り遅く迄話しては、他の人々の御迷惑になるまい、同氏は夜の更けるのは度々だ、遠慮なしに話さう……處で午前三時ヤツト話を切り上げて寢についた。

二六

測地學委員會の 經·度·觀·測·所

設置の建議

文部省測地學委員會は四月十一日午後三時文部省會議室で平山委員長その他各關係官列席し種々協議の結果十五年度には佛國巴里において開かれる萬國地球物理學會總會には是非とも我國で觀測した經度を發表することが必要になつてゐるのでこの際首相、文相に對し經度觀測所設置建議を申し合はせたがその設置場所には東京府下三鷹村の天文臺構内に約八萬圓の經費で建設をなす、これが完成すれば我國における地球觀測には現在設置してゐる水澤の緯度觀測所と天文臺内の子午儀と相俟つて完全の測地が同來るわけである。

辭 令

任京都帝國大學教授(四月十八日、内閣)

助教授 山本 一清

宇宙物理學第二講座擔任ヲ命ズ(四月二十日、文部省)

教授 山本 一清
(助教授 上 田 穰)